



【京都国立博物館】(計5件)

<絵画> (1件)


1 名称	竹石図 (ちくせきず)	品 質	紙本墨画
作 者 等	池大雅筆、宮崎筠圃賛	員 数	1幅
時 代	江戸時代 (18世紀)	寸 法 等	24.9×31.2cm
作品概要	<p>18世紀の京都画壇を代表する画家の1人、池大雅 (1723~76) による水墨画。大雅を尊崇した富岡鉄斎の旧蔵品で、すでに多くの展覧会出品歴、書籍掲載歴があり、小品ながら大雅の比較的初期の秀作として広く知られている。</p> <p>竹は、東アジアにおいて神聖さや長寿の象徴など古来さまざまな吉祥の意味合いをもつモチーフとして造形化されてきたが、特に文人画の世界では高潔な人格の象徴としてとりわけ好まれたモチーフのひとつである。冬でも枯れず緑を保って真っ直ぐに伸び、節を有する (=節操を保つ) 竹と、永続性の象徴たる石を組み合わせる竹石図も、そうした人格の象徴を含蓄する画題として文人画の定番である。</p> <p>与謝蕪村と並び日本における南画の大成者と称される大雅は数多くの墨竹図を描いているが、本作のように細く鋭い線描を用いる作品は珍しい。繊細できびきびした筆遣いが心地よく、特に竹葉はリズムカルな筆触の反復によってあらわされ、白さの際立つ紙地と墨色との対比が清新な趣を生み出している。こうした様式的特徴と落款の書体、用印 (「碧梧翠竹山房」白文長方印、「无名」朱文長方印) から、大雅30歳前後の作と考えられる。</p> <p>賛を記すのは、大雅と同時代に活躍した尾張出身の儒者宮崎筠圃 (1717~74)。京に出て伊藤東涯らに学んだ儒者だが、自らも墨竹図を得意として有名だった (平安四竹の一人)。詩文集等は残していないものの、同時代の画家と活発な交流があったようで、筠圃の着賛を有する絵画作品は多い。本作の賛は「邀月落龍影、傳風作風音 (月を邀へて龍影を落とし、風を伝へて風音を作す)」という五言古詩。月光に照らされ風に揺れる竹の様子を詠んだものだが、鋭い竹葉のシルエットはたしかに龍爪を思わせるし、澄んだ風音が聞こえてきそうな動感に満ちている。</p>		
購入金額	3,000,000円		
			

<金工> (2件)

2 名称	三足香炉 (さんぞくこうろ)	品 質	鉄・鑄造
作 者 等		員 数	1口
時 代	江戸時代・元和8年 (1622)	寸 法 等	口径28.2cm、高さ21.3cm
作品概要	<p>上方に向かってやや外向する直線の胴に、短い獸脚を備えた鑄鉄製の三足香炉。胴部に「奉寄進／本能寺／御影堂常／元和第八壬戌曆／鴨月吉日／願主／長尾小左衛門尉口口／法名宗巴敬／(以下2文字ずつ13名分の法名)／為谷是口口菩提也」の寄進銘を陽鑄することから、かつては本能寺の御影堂に納められていたと思われる。</p>		
購入金額	7,000,000円		
			

3 名称	短刀 銘達磨 (たんとう めい だるま)	品 質	鉄・鍛造
作 者 等		員 数	1口
時 代	南北朝時代 (14世紀)	寸 法 等	全長43.8cm、刃長32.4cm
作品概要	<p>平造・三つ棟の寸延短刀。この刀の作者である達磨派は南北朝時代・14世紀の半ばから後半にかけて綾小路周辺に居住していたとされる一派。記録の上では同派に所属する工人として、重光や正宗など数名の名前が挙げられているものの、その活動実体について確かなことが分からない流派の1つである。</p>		
購入金額	5,000,000円		
			

<陶磁> (1件)

4 名称	法花蓮池水禽図壺 (ほうかれんちすいきんずつぼ)	品質	色絵磁器
作者等		員数	1口
時代	中国・明時代 (15~16世紀)	寸法等	高35.3cm、口径17.6cm、胴径31.2cm、高台径19.0cm
作品概要	<p>青を基調として、胴周りに蓮や水鳥などを法花の技法を用いて描き出した壺である。法花とは、立体的に表した文様部分に色釉の鉛釉をかけた技法のことである。三彩や銅胎七宝との関わりなどとの関わりがあるとされ、形や文様などが景德鎮産の青花や五彩と共通する点が多い。壺の内側には緑釉が掛けられており、胎土は磁胎となっている。大振りな形状や蓮池水禽、瓔珞文や波濤文などの丁寧に表現された文様、そして釉色などからみて、現存する法花壺の中でも、優れた法花の大作のひとつといえる。こうした法花の優品は極めて少なく、稀少である。</p> <p>さて、法花が生産された地域などの詳細は明らかとなっていないが、中国・清時代から中華民国時代にかけて陶磁器研究を行っていた、許之衡が著した中国陶磁の解説書である『飲流齋説瓷』によると、「法花の器は元に萌し、明に盛行す、大抵は北方窯なり。蒲州一帯より出ずる所の者最も佳」とある。蒲州とは現在の山西省辺りのことで、古くから三彩の生産も行われてきており、法花との関係性が考えられている。また、本作品は明時代の中国陶磁を考える上で重要な作品であるとともに、京焼の技術系譜を考えていく上でも重要な作品といえる。江戸時代後半、水指や杓立などをはじめとした皆具や香合など、茶の湯道具としてつくられた陶磁器に法花の技法が多く用いられている。広い意味で交趾焼などとも呼ばれるもので、特に著名なものとしては、紀州徳川家のお庭焼として築窯された借楽園焼の製品が挙げられる。この窯には、樂旦入や仁阿弥道八などとともに、江戸後期の名工として名高い、永樂保全 (1795~1854) も招かれている。保全は、この窯で法花の技法を用いた浅黄釉や紫釉、青釉を基調とした茶道具を数多く制作している。この窯で焼かれた製品は、色調や技法などから考えると、本作のような中国・明時代の法花技法を用いた作品から着想を得ていることは明らかである。ただし、文様や形状などは茶道具や飲食器など、日本の趣向にあったものとなっており、単にそのものを写したのではなく、1つの技術として取り入れ、和様化していった様子が分かるものとなっている。</p>		
購入金額	22,000,000円		
			

<漆工> (1件)

5 名称	流水沢瀉蒔絵螺鈿香枕 (りゅうすいおもだかまきえらでんこうまくら)	品質	木製、漆塗、蒔絵、螺鈿
作者等		員数	1合
時代	桃山~江戸時代 (17世紀)	寸法等	縦11.5cm、横22.5cm、高16.2cm
作品概要	<p>香枕は、髪を乗せかけて香を燻らすための調度である。透かしのある木製の箱に引き出しを設け、中に小型の香炉を置くのが一般的だが、本品は上から蓋をする箱型である点が古風である。懸子 (かけご) の側板を立ち上がりとした合口造 (あいくちづくり) となっており、懸子の口縁は蓋の形状に合わせて反る。懸子は間仕切りで縦に二分され、火箸や匙などの細長い香道具を収納できるが、一方の区画の底板に梅鉢形の透かしを3つあけ、懸子を収めたままでも煙を通せるように作られている。</p> <p>衣服のみならず髪にも香をたきしめる平安貴族の習慣は、武家の暮らしに引き継がれ、近世には遊女たちにも広まった。本品は、長側面に牡丹と蕪が透かし彫りにされ、蓋表には悪夢を食べるといふ霊獣「獭 (ばく)」が彫られている。全体を黒漆塗とし、外面には螺鈿に付描 (つけがき) で沢瀉の葉を描き、金平蒔絵 (きんひらまきえ) に針描 (はりがき) で沢瀉の花や即興的な流水、ところどころの波頭や飛沫を描いている。この技法の組み合わせは近世初頭に西洋人向けに作られた輸出漆器にも通じる。</p>		
購入金額	2,200,000円		
			